

検索を科学する

塩田 紳二

第9回 GoogleとMSの対決で変わる次世代の検索技術

検索市場において不動の地位を築いたGoogle。一方、それを追ってMSNサーチや次期Windowsで巻き返しを図ろうとするマイクロソフト。次世代の検索技術はこの両者の対決から生まれてくるといえるかもしれない。そして、世界最大の家電イベント「International CES」においても、この両者が登場して注目された。今回は、その内容から検索技術の将来について考えてみたい。

ネットサービスであるGoogleが家電のイベントで講演

1月5日から米国ラスベガス市で、International CES(Consumer Electronics Show)が開催された。もともとは名前のように「家電」のイベントなのだが、いまやPCなどのIT業界も常連として名を連ねている。まあ、PCもいまや家電といえるぐらいには普及しているので出ていても不思議ではないのだが、その分、イベントが大規模になり、いまやIT系から見ても最大のイベントになりつつある。

米国のイベントではほぼ例外なく「基調講演」がある。まあ、業界の偉い人を呼んできて、今後の動向などを話してもらうものだ。これまでIT系では、インテルやマイクロソフト、あるいはHPといったメーカーが主だったが、今年は、インターネット企業である「Yahoo!」と「Google」が参加している(図1)。

実際、CES期間中に行われる発表の中にはいくつかGoogleがらみのものがあった。検索エンジンのGoogleがなぜ家電と関係があるのか?

それが、実は、今年からのトレンドなのである。Googleは、ご存じのように検索以外にもいくつものサービスをインターネットで提供している。いわば、インターネットの「サービス企業」である。しかも、その主な収入は「広告」であり、利用者からは直接料金を請求してはいない。

こうしたインターネットのサービスと、PCやさまざまなインターネットに接続可能なハードウェアやソフトウェアとが連携するのがこれからのトレンドなのである。

もちろん、これまでも電子メールのようにインターネット側のサービスと連携するものはあった。しかし、多くの製品は単体で利用でき、その上で情報提供やアップデートなどにインターネット側のサービスを利用していた。

しかし、これからは、ハードウェアもソフトウェアも、主要な機能がインターネット側のサービスと連携し、「常時接続」を前提とした製品になってくる。

マイクロソフトの最大のライバルとなったGoogle

いまや、マイクロソフトが最大のライバ

ルと考えているのはGoogleだろう。実際、次期WindowsであるVistaの登場に合わせ、マイクロソフトは、Windows Liveというインターネット上のサービスを開始すべく、すでにベータサイトを立ち上げている。Windows Vistaは、もちろん単体でも動くが、Windows Liveと組み合わせで提供される機能もある。また、Windows LiveメッセンジャーやWindows Liveメールは、Windows Liveのサービスとして、それぞれMSNメッセンジャー、Hotmailを置き換えることになる。



図1 CESに初めて登場したGoogle創業者の1人であるラリー・ページ。手に持っているのは、MITが中心になって開発している100ドルPC。



図2 Windows Live(ベータ版)のホームページ。ニュースや天気などのコンテンツを自由に配置できる。

Windows Liveのベータ版のトップページ(図2)は、Googleのパーソナル版のホームページ(図3)とかなり似ている。表示したいアプレットを自由に組み合わせて配置できるようになっている。

いまのところ、ニュースや天気といった外部の情報を使ったものがほとんどで、オリジナルといえそうなものは、メッセージとメールぐらい。Vistaの登場が2006年末なので、それまでにはいろいろと充実するだろうが、いまのところはGoogleのホームページに追隨している程度だ。CESの基調講演では、テレビ番組表やメッセージと動画配信を組み合わせたデモなどを行っている(図4)。

だが、GoogleがGoogle DesktopでPCのソフトウェアに進出し、また、Yahoo!がKonfaburatorを買収して、Yahoo Widgets Engineとして配布が行われている。すでにインターネットサービス企業側は、PCへ進出してきているのである。これをマイクロソフトが黙って見ているはずはない。

図4 CESでマイクロソフトは、LiveのEPG機能やメッセージを介したビデオ共有などをデモ。

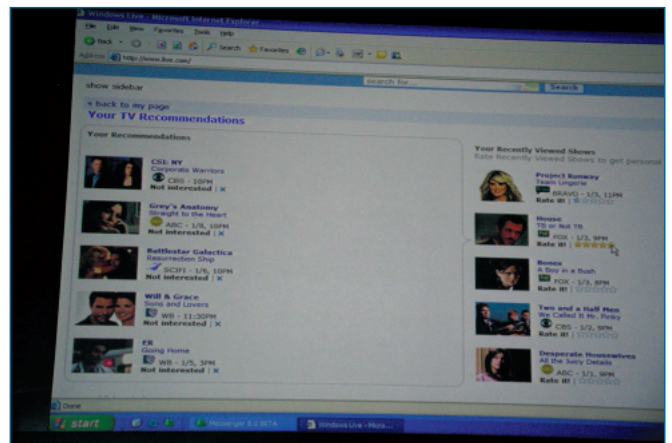
マイクロソフトによれば、Windows Liveは、広告収入モデルでビジネスが行われるという。まさにGoogleやYahoo!のスタイルだ。

Googleが発表したのはソフトウェアの簡単インストール用パック

そのGoogleがCESで発表したのが、Google Packである。これは、ソフトウェアの配布とアップデートを自動的に行う



図3 Googleのパーソナル版ホームページ。やはりニュースなどのレイアウトが可能。



新しいサービスである。Google Packが提供するの、Google DesktopなどのGoogleの手によるソフトウェアとFirefoxなどのオープンソース系ソフト、Adobe ReaderやNorton Antivirusなどのメーカー系ソフトなどだ。

そのままだと、単純なアーカイブサイトでしかないが、Google Packは、専用のソフトウェア(図5)を使い、インストールやアップデートを自動的に行う。また、各ソフトのインストーラーは、Google Pack専用のもので、途中でユーザーが操作す

る必要がない。つまり、この Google Pack をインストールしておけば、ソフトウェアのインストールはもちろん、その後のアップデート、おそらくは、新規に追加されたソフトウェアのインストールまで自動的に行われるようになる。

こうした、ユーザーの手を煩わせることなく、ソフトウェアをインストール/アップデートする仕組みは、マイクロソフトが.NET(同社のインターネット戦略や技術のこと)などで実現しようとしているものだ。

まだまだ、ソフト的には不足だし、対象は英語圏のみ(日本語版がある Google 系のものは、自動的に日本語が選択されるが、日本語版がないものはインストールされない)。しかし、これに OpenOffice とかの、実用性の高いソフトがある程度収録されれば、まっさらな PC に Google Pack さえ入れれば、最低限の環境構築が終わってしまう。しかも、それは、アンチマイクロソフトの環境なのである。

今回の CES では、Google が低価格の Google PC を発表するというウワサがあったが、この Google Pack は、それ以上のものだ。世の中に多数ある Windows マシンが簡単にオープンソース系などのアプリケーションを入れた環境になってしまうからだ。もし、Google Desktop のようにプリインストールが行われ

ば、マイクロソフトにとってもかなり大きな打撃になる可能性が高い。

もちろん、マイクロソフトも Windows Vista ではデスクトップ検索を組み込むなどさまざまな対策は行うだろう。しかし、現状では、ユーザーは OS の切り替えをハードウェアとともに行う。いまや、OS をアップデートするユーザーは少数であり、多くのユーザーが Vista を手にするのは、新しいマシンに買い換えるときである。

となると、Vista の普及には、これまで以上に時間がかかる可能性があるし、現状のように Windows 98 や 2000 を使い続けるユーザーも多いだろう。そうしたユーザーは、ある意味ですべて Google Pack の潜在ユーザーと成り得るのである。

Google Pack の真意と検索との関係

だが、この Google Pack、これまでの Google のサービスとはかなり異質に見える。情報ではなく、プログラム自体を提供するのだから。しかし、Google が検索用に構築したシステムを考えると、このサービスも簡単に構築できることがわかる。

まず、Google は、現在でも世界中からのアクセスに耐えるだけのアクセスライ

ンとサーバーを所有している。だから、世界中のユーザーが一斉にダウンロードを始めても問題はないだろうし、アクセス先を分散させれば、Google Pack のソフトウェア側でなんとでもできる。やるかどうかは別として、P2P 技術など、トラフィックを分散する技術はどんなものでも入れることが可能だ。これは、PC 側に専用ソフトを入れるため、そのアップデートなどで変更が可能で柔軟性が高いのである。

PC 上のソフトウェアには、こうした柔軟性がある。これは、ウェブブラウザだけでは得られないメリットの 1 つだ。だから、Google もサービスとソフトウェアの組み合わせに注目しているのだと思われる。

もう 1 つ、Google は、検索エンジンのために拡張性のあるファイルシステムを構築している。Google FS(ファイルシステム)などと呼ばれているが、これは、インターネットからダウンロードした情報や Gmail などに応用されている。

それらに比べれば、ソフトウェア自体が占めるバイナリーなどたいしたことはない。たとえ数千本のソフトウェアをリストアップしようとも、バイナリーイメージは 1 つのサイト(Google のサーバーサイトは世界各国に複数設置されているという)に 1 つあればいいのである。容量的にはハードディスクが数台でまかなえてしまう。

しかも、Google から見れば、Desktop や Picasa のような自身が提供するソフトウェアを常に最新状態に保つことができ、メリットも少なくない。

メッセージサービスでも火花を散らす両者

マイクロソフトは、MSN メッセージャーを Windows Live メッセージャーとし、本格的に Windows の付加機能として提供を開始する。現在配布が行われてい

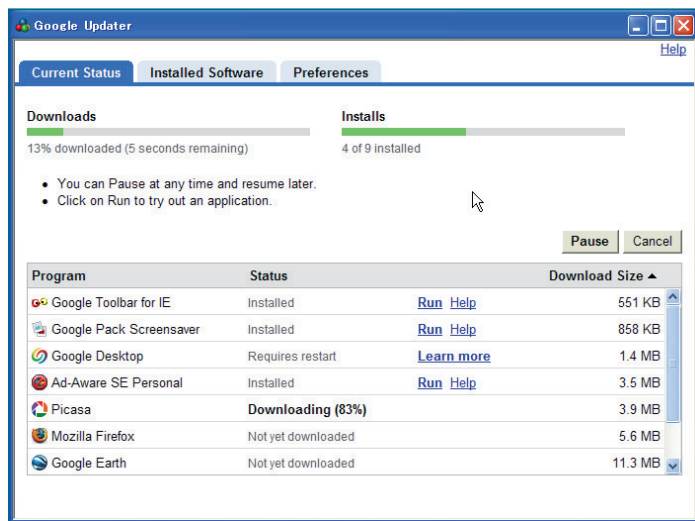


図5 Google Pack の中心になるのは Google Updater と呼ばれるソフトで、ダウンロードやアップデートを監視し、インストールやアンインストールなどを集中して行える。

るベータ版は、.NET Framework(ネットワークに適したソフトウェア実行環境) を使ったバージョンで、しかも、ユーザー間で直接ファイルを共有する機能を有している。

これまで、Windows には、標準で Windows メッセンジャーが付属してはいたが、多くのユーザーは高機能だがコマーマーシャルが表示される MSN メッセンジャーに乗り換えていた。それが今度は、Windows Live メッセンジャーになる。ベータ版を見るかぎり、名前が変わっただけで、バージョンは、現行の MSN メッセンジャーの次になる 8.0 だし、Alerts による広告などの表示も変わらない。

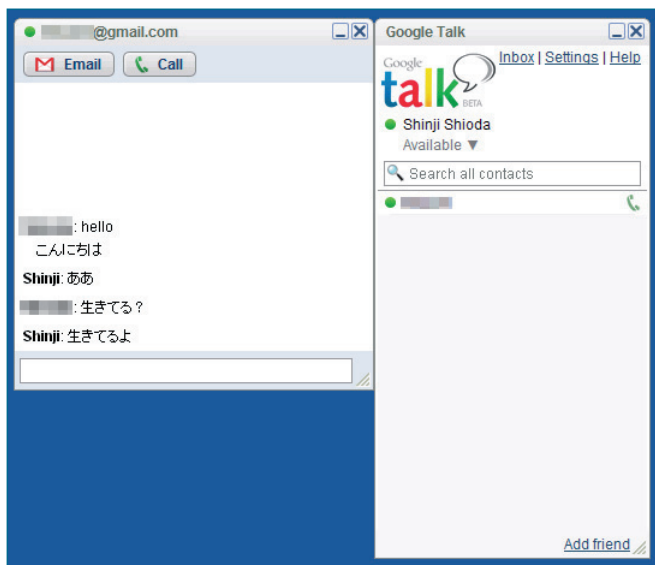
ただ、これまで広告が表示されていたところには、ビデオの再生機能が組み込まれ、MSN のニュースサイトへの URL やそこで公開されているビデオ映像へのリンクが表示される。

これに対抗しようとしているのが Google Talk である(図 6)。CES では、直前に出資が決定した AOL のメッセンジャー AIM との連携が発表された。実は AOL メッセンジャーは、米国では、5150 万人とシェア 1 位で MSN メッセンジャー(2730 万人) よりもユーザーが多い。さらに Google Talk は、現在では Windows 用のみだが、Blackberry や NOKIA770 といったモバイル機器向けに移植が進んでいるという。

ちなみに AOL の出資もマイクロソフトとの関連で決定されたという。実は、AOL は、Google の最大顧客の 1 つだ。そこにマイクロソフトが出資したのでは、収入源を失いかねないというわけだ。もちろん、この AIM との連携のように Google 側にもメリットのある出資ではある。

これに対してマイクロソフトは、シェア 3 位(2190 万人) の Yahoo! Messenger との相互接続で合意し、今年の第 2 四半期から接続を開始する。

図 6 Google が始めた文字/音声のメッセンジャーサービス、GoogleTalk。仕様が公開されたプロトコルを使う。



CES の発表内容から占う 検索サービスの将来像

インターネットは、個人でも大量のデータを入手し、さらに自らが持つデータを公開する機能を提供する。ユーザーがブログを 1 ページ書くごとに、あるいはローカルで文書を 1 つ作るごとに、メールを 1 つ書くごとに、インターネット全体で情報が蓄積されていくことになる。

1 人の個人から見れば、インターネット+個人のストレージがすべて情報の保存場所なのである。

すでに Google やマイクロソフトがインターネット検索とデスクトップ検索を提供しているように、こうした大量の情報をどうやって見つけるのが現在の大きな問題だ。また、その対象もテキストから、音楽やビデオに広がりつつある。

インターネット検索というと、Google のトップページのような文字列入力の画面が浮かびがちだが、今後は、さまざまな場面で検索が動き、その結果がさまざまなユーザーインターフェイスで提示されることになると思われる。たとえば Google NEWS なども、条件は不明ながら検索の結果である。

アプリケーションにしても、自身の独自フォーマットや読み込み可能なファイル形

式を検索して、リストとして提示するような機能が必要になるだろう。さらに、インターネットからテンプレートとなるような文書などを探してきたり、文章に関連する資料を探すとすることも必要かもしれない。

それがワープロや表計算といったビジネス系のソフト以外でも、たとえば音楽プレーヤーソフトが再生している音楽のジャンルやプレーヤー、作曲者などをキーワードにさまざまな情報を探してくるなんてこともありえるだろう。

画像や映像もリアルタイムの認識はいまのところ必要ないため、そろそろ一般向けに普及しそうな技術である。観光地に行くと写真を撮れば、同じ場所で写真を撮った他人のブログが見つかるなんてこともありえるかもしれない。

Ajax 技術の登場により、もはやちょっとした GUI アプリケーションもウェブブラウザベースで可能になった。となると、ローカルのアプリケーションは、よりインタラクティブ性を求められることになる。Windows Vista などを見るに、3D 技術などが大きく取り入れられることになるのではないかと。そしてローカルアプリケーションの特質を残しつつ、インターネットとの連動を何かしら持つというように変わっていくのだと思われる。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp